



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト

ー今月のショットー

プロクションマッピングー魔法の扉ー



会場準備



はじめは入所者さんの作品
が映し出されていたが…



魔法の扉が出現…ノック
するとキャンディーが
降って来たり

チョウチョが飛び回っ
たり…



最後は本
物の扉が
出現。中
からギフト
が！！

2015年 3月号

ー院内の小さな声からー

当日は、5人ずつ、15分間、8回に分けて上演しました。薄暗がりの中で、七色の光の粒が、画面の前に立つ人を追いかけます。まるで魔法の粉がかかったようでした。突然表れたいくつもの扉の中で、好きな色の扉をノックすると、大きなクマが出て来たり、空からキャンディーが降って来たり、綺麗な模様が現れたり。療育指導部の佐々木児童指導員さんはいつの間にかストーリーを組み立てられて、「さあ！みんなで魔法の言葉を唱えましょう！」と、プロ並みに誘導します。看護師さんや保育師さんの連携も素晴らしく、車いすを移動したり、クッションで体の向きを整えたり、大喜びする入所者さんのよだれを拭いたり、絶妙なタイミングでサポートが入ります。おかげさまで大勢の方が参加してくださったにも関わらず、何の問題もなく、プログラムを終える事ができました。最後に吉岡さんが「アイトラッカー」という目の動きを感じ取るセンサーについて説明して下さるのを、スタッフの皆さんが輪になって熱心に聴いていました。「これだと ALS の患者さんでも、意志を伝えやすいかもしれない」「筋ジストロフィーの患者さんもおそらく取り組んでくれるかもしれない」そのまなざしの向こうに確かな希望を見た気がしました。



プロクションマッピングー魔法の扉ー

「これだけ科学が進歩して、その恩恵を受けられる時代に生きているのに、まだ、本当に必要な人に届いていない。と感じる事があります。特に医療の分野で、もっと、医療サイドと患者サイドのコミュニケーションをはかる新たな手法が生まれてもいいと思うんです。」ボランティアで東京からやってきたプログラマー吉岡純希さんは話します。プログラムを組むにあたって、療育指導部の担当者とスカイプ会議をしたり、イメージを共有するためにネット上で何度もデータをやりとりしたり、東京と香川という距離を埋める為に様々な手法を使いました。現場の職員さんとの対話の中で、「見る。」ためだけのプロクションマッピングではなく、センサーを使って入所者さんのアクションから何かが起こる。というような仕掛けにしよう。魔法の世界で夢を見るのも大切だけど、最後は現実の世界にちゃんと帰って来れるようなストーリーにしよう。など、大枠が決まってゆきました。中でも印象的だったのは、療育指導部の皆さんが日々、最も望んでいることが、「入所者さんが今、何を考え、感じているのか本音が知りたい。自分がこんな人だ。と思い込んでいる入所者さんの新たな一面が見たい。」だった事です。センサーも、アートも全ては、「自分の想いを伝え、相手の真実の想いを知ろうとする挑戦のための媒体」なのだと再認識しました。人はどこまでも、コミュニケーションを欲する生き物なのだと思います。今回、新しいコミュニケーションの可能性を見せてくれた吉岡さんに心より御礼申し上げます。

作家:Ikecoo「あなたの事が大切

入院中の子どもさんはお父さんお母さんが一緒にいてくれるのが、一番安心で、一番嬉しいと思い、お父さんお母さんの居ない日や、夜でも少しでも安心した気持ちになって欲しいなあと思い、親に抱っこされている絵を描きました。